

『イエズス会士日本通信』 『イエズス会日本年報』

安野眞幸

はじめに

『イエズス会士日本通信』 『イエズス会日本年報』について、高校の授業で直ぐ使える実践的な史料紹介を、これが編集者からの依頼であった。高校の教科書や史料集に必ず引用されるものに『日本通信』ビレラ書簡の「堺はベニスと似た自治都市だ」がある。しかし『日本通信』 『日本年報』は堺のことを言うためにのみ存在しているわけではない。これらが全体として目指しているのは日本布教の報告であり、この書簡集は発明当初の印刷機によって印刷され、たちまちベストセラーとなり、日本布教の成功はプロテスタントの攻撃により自信を失ったカトリック教会を甦らせるきっかけとなった。

過去の事実に関いかけを行うのは常に現在の我々であり、史料を読みなおして新しい何かを見つけることも現在の立場

に立つてのことである。今の若い高校生諸君が歴史に興味を持つことに少しでもお手伝い出来ればと思い、ここではこれまでの私の研究を踏まえて「平和」について述べてみたい。指導要領はもとより教科書にも載らない事柄を取り上げるのは恐縮だが、歴史の本質は暗記ではなく、事柄の見直し・未来に対する新たなパースペクティブを持つことにある以上、お許し頂きたい。また紙幅の関係で十分に意の尽くせないところは小著をお読み頂き、各自補って頂きたい。

戦後の平和運動

湾岸戦争以来、現在の日本国家の課題は、世界の平和維持のため如何に国際貢献をするかにあり、自衛隊の海外派兵は大国となった日本国が国連の常任理事国入りをするための条件のようで、事実自衛隊はカンボジア・ルワンダ・ゴラン高

原等々に次々に出かけている。これは自衛隊は違憲か否かを論争してきたこれまでには想像さえしなかつた出来事で、今や「平和」は日本外交の課題のようである。今ここでこのことの当否を論じようとは思わないし、またその準備も無い。戦後と現在との違いを強く感じると共に、ソ連の解体・冷戦の終結以後の我々を取り巻く世界の変化の激しさを思うばかりである。

今年には戦後五〇年ということで、戦後を見直す様々な企画があつた。戦後の大衆運動のスローガンが「平和と民主主義」とより良き生活」であつたことが示しているように、戦後においては、国内問題として、また民衆の自発的な運動の課題として「平和」があり、原水爆禁止運動から反基地闘争・反安保闘争・ベトナム反戦闘争に至る一連の「平和運動」があつた。敗戦の悲惨な現実、無惨な戦争体験から、「もう二度と戦争は繰り返したくない」「今こそ平和を」の願いは多くの人々に共通するもので、このことを根拠に民衆運動としての「平和運動」「平和のための戦い」は成立したのである。

しかし「平和のための戦い」を徹底して追及した学生運動が終息した頃、戦後の平和運動もまた退潮したと私は思う。その理由には、「平かに和らぐ」を意味する日本語の「平和」が、本来「闘い・戦争を止めること」を意味し、どちらかと言うと「大勢順応」に傾き、「社会の大勢に逆らうこと」や「人

と人との間に波風を立て、荒々しく対立すること」を含んでいなかったからだと思う。それゆえ「正義のための戦い」とほぼ同義な「平和のための戦い」は、「生活の安全」や「和を以って尊しとなす」思想に反するものとして、時間と共に人々から遠避けられ、魅力を失つていったのではあるまいか。

つまり「平和のために戦う」という考え方は、戦後の特殊情況から自然発生的に生まれたものではあるが、日本語の世界においてはむしろ馴染のない変種だつたと思うのである。

もちろんそこには体験の風化や日本経済の発展という要素をつけ加えることも出来よう。一方、民衆が「平和」を求めて立上り、平和の敵と闘つた実例として、中世ヨーロッパ、特にフランスや西独における「神の平和」運動を挙げることが出来る。ここでは本来武力を持たない教会が、封建領主たちの行うフェーデー||自力救済を平和の敵||暴力とみなし、誓約団体を形成した民衆の力を頼りに闘つたという。

それゆえ「平和のための戦い」は、もともとキリスト教と係わりがあると私は思うのである。キリスト教徒たちが日々祈る「主の祈り」には「御国を来たらせ給え、御心の天に行われる如く地にも行なわしめ給え」があるが、この神の「御心」を「正義」や「平和」と置き換えるなら、キリスト教徒たちは常に「正義」や「平和」をこの地上に実現させようと祈っていると看做すからである。しかしフランスにおける初期

の「神の平和」運動が示しているように、「平和のために戦う」運動はむしろ逆説的に戦争に明け暮れし、悲劇的な終末を迎えたという。(マルク・ブロック『封建社会?』みすず書房、一三三頁)

最近のボスニアをめぐる明石国連代表の解任劇の背後には、この「平和」についての日欧間の考え方の違いがあり、日本流の考え方は、結果としてセルビア側の「既成事実」の追認を意味し、正義に反することになる。「平和とは本来正義でなければならぬ」という考え方があったのではなからうか。

秀吉の平和と神の平和

戦後の平和運動が終息した今から凡そ十年前、学界では藤木久志・高木昭作両氏によって「秀吉の平和」として①大名相互間の戦争を禁じた「惣無事令」②村落に対する「喧嘩停止令」③百姓に対する「刀狩り令」などが取り上げられた。より正確に言えば、両氏の主張はこれら秀吉の「平和令」の中に当時の民衆の平和への願いの反映を見ようとするものであった。これは江戸時代が戦争の無い平和な時代であったこと、江戸時代に至り「喧嘩両成敗法」が「天下の大法」になつたことなどを踏まえ、中世から近世への日本社会の転換や近世社会の特質を説明するものとして主張されたのである。

一方、私は著書『パテレン追放令—16世紀の日欧対決—(日本エディタースクール出版部、一九八九年)において、『イエズス会士日本年報 上』(『新異国叢書』3、雄松堂、一九六九年)の「一五八二年二月十五日付、長崎発のコエリユ書簡」(同書四三〇四五頁)の分析から、天正九(一五八一)年に長崎では「神の平和」の誓約が為され、これを機に自治都市長崎は実質的にイエズス会の支配に服し、教会領長崎が成立した。ヨーロッパにおけるのと同様、誓約団体「コミュニオン」の成立・拡大が見られ、短期間に都市周辺地域「コンタード」に対する征服戦争が進められ、教会領長崎が拡大したことが等々を明らかにした。

「秀吉の平和」が「徳川の平和」「ローマの平和」と同様、権力による平和であるのに比べ、「神の平和」は一般的には民衆による平和運動とすることが出来る。しかしイエズス会士がヨーロッパの歴史を直接日本社会の中に暴力的に持ち込み成立した長崎の場合はどうだろうか。「コエリユ書簡」は、ポルトガル人の僕しもであった日本人が長崎の町の有力者に対して敵討ちを行い、両者は聖堂の中で共に倒れ、事件は一端終息したが、人々が聖堂を聖域として認めず、聖堂が荒されたことをイエズス会側は遺憾とし、パードレ一同は長崎を退出し、教会を閉鎖して教会法上の「聖務禁止」を行ったとある。これに対して「市の重立つた者一同が①聖堂を尊敬し、②

今後聖堂に逃げ込んだ者の自由と聖堂の不入権を尊重し、③ 暴行者に対して聖堂及びパードレを守護すべきことを公に誓った」とコエリユは記している。②・③から、長崎の町の有力者たちは「聖堂」という場所、及び「パードレ及び今後聖堂に逃げ込んだもの」に限って、今後は暴力行為を禁じ「平和」を守ることを多くの人々の前で正式に誓約したことになる。これこそは十世紀のフランスなどで見られた場所・人物・期間を限って自力救済や一般の暴力行為を禁止する「神の平和」の誓約と同じものである。

①・③から、長崎の自治組織は「聖堂やパードレ」に服従することとなり、これを機に長崎はキリシタンの町となったこと。また前年大村氏から寄進を受けたイエズス会はここで初めて長崎の実質的な支配者になり、教会領長崎が成立したことを認めることが出来る。コエリユはこの記録の最後で「パードレは荘厳なミサを歌い、聖堂を祝福し、日本人及びポルトガル人皆大いに感激し、多数の人は信心の涙を流し……我等が主に感謝した」と述べており、ここからこれが長崎における布教活動の大成功を示す特筆すべき事件であり、それゆえ『日本年報』に記録されたことが知られるのである。

しかしだからこそ逆に「神の平和」以後イエズス会に指導された、多少グアティーナ面を持つ民衆運動としての長崎のコミュニケーション運動は『日本年報』には記されず、その後の運動

は日本側の記録からのみ再構成することが出来る。この誓約を契機に長崎の誓約団体コミュニケーションは都市の支配領域を長崎村・浦上村・外海村へと拡大し、教会領長崎の境界は日見峠・時津村までに拡大し、教会領の支配者イエズス会は都市長崎のみならずその周辺地域をも支配する「王侯の如き」存在へと変化したとある。つまり港市長崎は「神の平和」を契機にイエズス会の国家・港市国家へと発展したのである。

つまり南蛮貿易を中核とする十六世紀の港市長崎において、十・十一世紀の西欧世界と全く同じ歴史が再現された。それゆえ長崎の「神の平和」は、より正確に言えば、むしろ自治都市発展の運動と言うべきで、クリユニュー修道院の教会改革運動と結び付き、平和の敵と闘った純粹な民衆運動であるフランスのタイプよりは、むしろ誓約団体コミュニケーションが都市君主である司教を追放し都市の自治権を拡大する、都市の市民運動と合体した西独のタイプや、あるいは「神の平和」運動ではないが、誓約団体が都市周辺地域コングラドを征服し、都市国家を形成したイタリアのタイプと似ているのである。

また聖堂の前で公に誓う在り方は、神社の境内で起証文を焼き「一味同心」を誓う日本史上の「一揆」ともよく似ている。このような誓約団体は、課題を核に結集したものであるから、そもそも課題が無くなれば解体する運命にあった。そ

れゆえ逆に誓約団体の存続を努力する限り、内部的な緊張を維持する必要から常に課題Ⅱ敵を外部に向かつて好戦的になったのである。ここにコミュニケーションが外に向かつて好戦的になり、戦線を次々に拡大した原因がある。長崎の場合、これがコミュニケーションの拡大、コンタクトへの征服や天正十二(一五八四)年の島原合戦や天正十五年の九州戦への参加となつて表われた。

日本の歴史の中に西欧を発見することは、明治以来の日本の運命、文明開化Ⅱ西歐化路線によつて日本の歴史学が強い

〈掲載史料の訳文〉

当所において起つた一事件は、一ポルトガル人と日本の僕一人のことであつた。この青年の父が同所の頭立つた他の日本人に殺されたため、青年は復讐を企てたが、相手は非常に勇猛で力強いので、その気づかない折を見計つて、側方から剣をもつて彼を刺し、直に聖堂に逃込んだ。傷を受けた者は抜刀を提げて非常な勢で追跡し、小銃の着弾距離に在つた聖堂内で追付き、これを斬つて兩人ともに倒れたが、死に瀕して告白をなし、互に罪を宥し、悔悟の意を表して救はれる兆を示した。この騒を聞いてポルトガル人及び日本人等が武器を執つて駆けつけ、ポルトガル人は住院に入ったので、パードレは破壊を防ぐため、直に戸を悉く閉づることを命じた。

られたテーマであり、日本中世史の中への西歐中世の発見は、これまで封建制や領主制の日欧比較の問題として論じられてきたが、ヨーロッパの歴史が直接日本社会に再現された長崎における「神の平和」という事実もまた注目しなければならぬ。なお長崎における「神の平和」と「秀吉の平和」の交差点に「バテレン追放令」を挙げるとしても、両者の関係をより一層具体的に明らかにすることは今後の私の課題である。

(あんの・まさき／弘前大学教授)

外には多数の日本人が集り、その中には最初に傷を受けた者の兄弟一人と多数の親戚及び友人がいた。この人達はポルトガル人がカザ内でのその兄弟を殺したと聞いて非常に憤り、戸を開けよと叫んだ。騒擾が大きくなり、彼等が激昂の余り暴力を用ひて侵入し、かくの如き場合に通常であるやうに、大なる不幸の起らんことを懸念し、パードレは事の顛末を詳に語らせた。事件の確実なる始末を聞いて彼等は全く鎮つたが、聖堂は荒され、強いて侵入せんとして不敬を行ったことが、貿易時期にして、異教の商人等が日本の各国から集来した際であつたため、ビジタドルはこのことを重大視し、キリシタンならびに異教徒等に聖堂を尊敬すべきことを覚らせる必要を感じた。そこで、同夜長崎のキリシタン中最も身分高く

Do Anno M.D.lxxxij lib.1.

mandando tirar da igreja o retabolo, & os ornamentos dos altares deixandoos a todos mui confusos. E posto que o padre entendia ser este caso accidental em que elles tinhaõ pouca culpa, todavia importa muito nesta noua Christandade fazerlhes sentir, & entender a grauezza de semelhantes soccessos. Sabendo polla menhá os principaes do lugar o que o padre passara á noite com aquelle Christão, & sua repentina ida vendo a igreja sem retabolo, & sem ornamentos, sò, e de semparada, foi tamanho o seu sentimento que indo ter com o padre que ahi ficara se offerreceraõ a toda a satisfação. que quisessem delles, & porque se podia attribuir ao irmão, & parentes do morto, & aos moradores da sua rua aceitarão, q̃ estes todos fossem logo desterrados sem lhes ficar mulher, nem menino no dito lugar, o que logo se executou ficando todo o lugar espãtado, & atemorizado, dizendo os gentios maravilhas do grande respeito, & acatamento que entendião deuerse ter á igreja. Depois d'isto alimparaõ, & renouaraõ toda a igreja, fazendolhe nouo pauimento, & esteirandoa de nouo como costumão em Iapão. Isto feito mandaraõ embaixadores ao padre Visitador que estauz em Arima, pedindolhe perdaõ, & offerrecendolhe a toda a mais satisfação que quisessem, pera que mãdasse que na igreja tornassem a dizer missa como dantes. O padre os despachou mostrãdo estar algũ tanto satisfeito, mas que o caso fora tam graue, que se

não podia fazer o que pedião até elle tornar a Nangaçãqui com o padre Vice Prouincial. Passados quinze dias tornou o padre, & determinando defenuiolar a igreja, ordenou que se fizesse hũa procissão mui solene com todos os padres, e irmãos que eali estauão, à qual concorreo infindade de gente. Acabada a procissão se lhes pregou declarandolhes o grande respeito que á igreja se deue ter, & como ficou violada derramandose nella sangue humano. Depois todos os principaes do lugar fizeraõ publicamente juramento solene de ter reuerencia á igreja, guardindolhe dahi por diante sua imunidade, & liberdades pera todos es que a ella se acolhessem, & q̃ a defenderião de qual quer pessoa que lhe quisesse fazer violencia a ella ou aos padres. Isto feito o padre a tornou a benzer cõ a solemnidade cantando missa solene, com tanta edificação dos Iapõeses, & Portuguezes, que muitos delles chorauão com deuação, dizendo quão grande fora o proueito, & fruto que deste caso se tirara, pois os fizera entrar em si, dando graças a nosso Senhor por se acharem presentes a este acto. O padre perdoou logo a todos os desterrados, fazendoos tornar pera suas casas, tornando primeiro os homẽs todos hũa disciplina publica na igreja cõ o mesmo juramento, & pedindo perdão a todos, & finalmente á tarde festejaraõ todos com grande alegria a tornada do padre, & o beneficio que lhes fizera concedendo lhes este perdaõ.

¶ Na casa, & residencia de Vòmura ouucriã

Cartas de Iapão

enitaraõ, & o fruto que se faz em conuerfloës, & casos particulares: pois dos costumes dos Iapões tam contrarios aos nossos, & de estarmos em terra noua, & entre gente tam ignorante das cousas de nossa lei, bem se pode entender quaõ frequentemente possaõ acontecer casos de muita edificação, & espanto.

¶ Neste lugar aconteeo, que está do hum Portuguez, & hum moço Iapão; cujo pai lhe matara outro Iapão, que era hum dos principaes deste lugar, desejando o moço vingarse, & vendo que o outro era de grande esforço, & poder, tomádo o descuidado o atraueffou de parte aparte com hum punhal, & logo se acolheo á igreja. O ferido o leguiu com grande animo, indo apos elle com j hũa espada nua na mão até a igreja, que estaria dahi a hum tiro de espingarda, & nella o alcançou, & ferio de maneira que cariraõ ambos quasi mortos, ainda que tiueiraõ tempo, pera se confessar, & perdoar hum ao outro acabando a vida com muitos sinaes de contrição, & indicios de se saluarem. A este reboliço acodiraõ os Portuguezes, & os Iapões com suas armas, & os Portuguezes entraraõ em nossa casa, mandou logo o padre fechar as portas por não auer algum desconcerto, ou desmancho: da bãda de fora se ajuntou grande multidã de Iapões, entre os quaes vinha hum irmão do primeiro ferido com muitos parentes, & amigos, os quaes mui sentidos por lhe dizerẽ, que dentro em nossa casa o matairaõ os Portuguezes, bradanaõ que

lhe abrissem as portas. Pois como o reboliço fosse grande, & elles cõ grande matinada, & furia parecia quererem entrar por força, donde se seguira algũ mal grande, como costuma acontecer em semelhantes casos, de uelhes rezãõ do q̄ passaua, & sabendo a certeza do caso se quietou tudo, mas porque a igreja ficaua violada, & polo defacato que lhe fizeraõ em quererem entrar nella por força, principalmente acontecendo isto no tempo da feira, ou de concorrem os mercados gentios de diuerfos reinos de Iapão, pareceo ao padre Visitador q̄ se deuia fazer mais caso da cousa, pera que entendessem os Chriãõs, & gentios o acatamento, que á igreja se deu ter. Pello que logo á noite mandou chamar hum Chriãõ dos mais honrados, & virtuosos de Nangaçãqui, & em breues palavras com muito sentimento lhe deu a entender quaõ grande fora o defacato que a igreja se fizera, dizendolhe que estaua em a mandar desfazer, & pôlla por terra, & que o que mais sentia daqui era q̄ tendo elle tanto amor aos Chriãõs de Iapão, & desejando de fazer muito por elles, elles pello contrario dessem tam mau exemplo de si aos portuguezes, & gentios, q̄ ali se acharaõ com tal irreuerencia á igreja, pello que quando os Chriãõs de Búngo, & os de Miãco soubessem, ficariaõ pera com elles perdendo sua honra, & seu credito, & que pois elles eraõ taes, elle não estaria mais nem hum só dia em suas terras, mas que ao outro dia poja menhã se parteria pera Arima mandando

有徳なる人を招いて、言葉少く聖堂に対して行はれた不敬の甚大なることを語り、これを破壊して地に委することを命ずる意向を伝へ、また殊に遺憾とするは、パードレが日本のキリシタンを愛し、そのために多くなさんと欲するにかかはらず、彼等が聖堂に対しかくの如き不敬を行ひ、同地のポルトガル人及び異教徒にその短所を示したことである。もし豊後及び都のキリシタン等がこのことを聞いたならば、彼等に対する信用と尊敬を失ふであらうと述べ、彼等がかくの如き者である以上、彼は一日もこの地に居ることを欲せず、早朝出発して有馬に赴き、祭壇の木彫の画像と装飾を聖堂より持出すであらうと言つた。パードレはこの突発事件に関して彼の責任が少かつたことは認めてゐたが、この新しいキリシタン教会にかくの如き事件の重大であることを覚つて遺憾と思はせる必要を感じたのである。市の重立つた人達は翌朝になつて、パードレがかのキリシタンに語つたことを聞き、彼が忽ち去り、聖堂は画像及び装飾を取除かれ、これを護る者もなくすることを知つて非常に悲しみ、パードレのもとに行つて同所に留らんことを請ひ、如何なる贖罪も命令に應ずる旨を述べた。而してこのことにつき責任者ありとすれば、死者の兄弟及び親戚ならびに同じ街の居住者であると考へ、直に彼等一同を市より追放し、妻子も市内に留めざることとした。異教徒等はこれを見て聖堂の大きに尊敬すべきことを覺

り、市の人は皆非常に驚き且怖れた。つぎに聖堂を清掃修繕し、床を新にし、日本の習慣により畳を取換へた。このことを終つて有馬滞在中のビジタドルのもとに使者を出して宥を請ひ、この上の贖罪をもなすべしと申出で、従前どほり聖堂においてミサを行はしめんことを願つた。パードレは少しく満足せることを示して彼等を帰させたが、事は非常に重大なるをもつて、彼が準管区長と共に長崎に帰るまではその希望に應ずることは不可能であると言つた。十五日を経過してパードレは長崎に帰り、同所にゐたパードレ及びイルマン一同莊嚴なる行進 *procession* を行ひ、無数の人がこれに参加した。行進が終つて説教をなし、聖堂を大いに尊敬すべきことを説き、人間の血を流したために聖堂が汚されたことを述べた。終つて市の重立つた者一同が聖堂を尊敬し、今後聖堂に逃げ込んだ者の自由と特權を尊重し、暴行者に対して聖堂及びパードレ等を守護すべきことを公に誓つた。ついでパードレは莊嚴なるミサを歌ひ、聖堂を祝福し、日本人及びポルトガル人皆大いに感激し、多数の人は信心の涙を流し、この事件によつて彼等が得た利益は多大であつたと語り、この式に列するを得たることにつき我等の主感謝した。パードレはつぎに追放された者を悉く赦してその家に帰らせたが、男子はまず聖堂において公にデシピリナを行ひ、前と同じ宣誓をなし、諸人の赦を請うた。午後には一同パードレの帰還を喜

んで大いに祝し、彼等を赦した恩を謝した。

大村のカザとレジデンシヤの管轄地区と町村の数は長崎に劣らないので、バードレ三人を置く必要あれども、現在は人員欠乏のためバードレ二人とイルマン二人が駐在し、必要な数はシナから来り、またノビシヤドを出るを待つて補充せんとしてゐる。このレジデンシヤ管内の町々に新たに五、六カ所聖堂を建築した。ドン・ベルトラメウはビジタドールを都よりの帰途に迎へて盛大なる祝宴を開き、訪問のため二回長崎に来た。ビジタドールはドン・ベルトラメウならびに重立ったキリシタン等の請に任せ、降誕祭（一五八一年十二月二十五日）には大村に行き、甚だ莊嚴に祝を行ったが、例のとほり演劇の催しもあつた。ドン・ベルトラメウや同バードレを歓迎したこと、また日本の大身達がその領地において彼を歓迎したことは諸人の熟知してゐるところである故、ここに述べず、これが通常の歓待であり、各地において彼に対して親愛を示した彼を大いに尊敬し、常に訪問せることを記すに止める。当地方において異教徒約四百人に洗礼を授けたが、土着の人は昔キリシタンであつて、彼等は他の地方から来た者である。